

今年、光村図書は創立65周年を迎えます。1949年の創立以来、小学校・中学校・高等学校の教科書ならびに一般書籍の編集・発行を行ってまいりました。近年では、デジタル教科書・教材の開発に取り組み、教育の可能性を広げるべく、挑戦を続けています。

多岐にわたる発行物を携え、これからも、子どもたちの未来のためにまっすぐ歩んでいけるよう、このたび、会社のシンボルマークとロゴタイプを制定いたしました。

シンボルマークのモチーフは、光村図書の原点ともいえる「かざぐるま」の羽。かざぐるまを並べたときの、つながりの部分をシンボライズしています。

デザインを手がけてくださったのは、グラフィックデザイナーの佐藤卓さんです。弊社ウェブサイトでは、制作時のエピソードをご紹介します。ぜひご覧ください。

●光村図書ウェブサイト
「シーズン・インタビュー 佐藤卓」
www.mitsumura-tosho.co.jp/season/2013_winter/01.html



光村図書



かざぐるまとかざぐるまのつながりの部分をシンボライズしている。



1950年、光村図書が初めて刊行した小学校国語教科書「かざぐるま」読本。かざぐるまは、光村図書の原点ともいえる教育の理念を意味している。

教科書訂正のお知らせ

平成27年度用教科書『美術2・3下』では、平成26年度用から右記の箇所を訂正いたします。校内の先生方でご確認のうえ、ご指導の際には、十分ご留意くださいますようお願い申し上げます。

P7 図版キャプション
作家生没年

(26年度)
ピーター・ヘンドリクス
[1944～ 南アフリカ]

(27年度)
ピーター・ヘンドリクス
[1944～2013 南アフリカ]

美術準備室 No.5

2014 (平成26) 年5月16日

発行人 ■ 常田 寛
発行所 ■ 光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話：03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■ Better Days (大久保裕文+小倉亜希子)
印刷所 ■ 株式会社 加藤文明社

2014

美術準備室

つ く る ・ み る ・ 感 じ と る

第5号

光村図書

特集

五感を使って鑑賞する

アトリエ訪問
彫刻家

舟越 桂

作家の肖像

写真家 土門 拳

子どもの世界をとらえる

「平凡な日常」

放課後ART

●埼玉県川口市立元郷中学校

●山形ビエンナーレ2014

この1点

「東京オリンピックポスター 陸上」
増田明美

舟越 桂

彫刻家

静かなたたずまいの中に、
凛とした強さを感じさせる舟越桂の彫刻。
彼の作品はどのような場所で生み出されているのだろう。
ある日の夕方、一軒家を改装したというアトリエを訪れた。

撮影 永野雅子

ガラス戸からあたたかな光がもれている。呼び鈴がないため、戸をノックすると、「どうぞ。靴を履いたまま上がってください」と、笑顔の舟越さんが迎えてくれた。

—— アトリエには、いつも何時頃に入られるのですか。

舟越 だいたい、夜の6時から7時ぐらいに入り、明け方までいます。完全な夜型ですね。

ここにアトリエを構えて10年になるかな。築30年以上の小さな一軒家を改装して使っています。2階はデッサンをしたり仮眠をとったりする場所、1階は木を彫る場所です。

ちょっと散らかっていますが、僕は物をしまわずに外に出しておくのが好きなので、このほうが居心地がいいんです。

—— 壁にメモがたくさん貼ってありますね。

舟越 思いついたことは、忘れないうちに紙に書くようにしています。



アトリエには、これまでに制作した作品が並ぶ。手前にあるのは「水に映る月蝕」(2003年)。

作品をつくるときの心得になるし、何らかの形で作品に結び付くかもしれないと思って。

—— 「アトリエは迷いの場である」と書かれたメモがありますね。

舟越 木彫を始めて30年以上になりますが、これまで自分がやってきたスタイルに固執したくないと、いつも思っています。そのときに感じたことや出会ったことを受けて、新しい作品を生み出していきたい。だから、そのつど迷い、考えている気がします。

制作中、なかなか作品が「立ち上がってこない」と感じるときがしばしば苦しいです。それでも、制作を続けていくと、あるとき「あっ、ここにノミを入れればいいんだ」と気づく。そういうとき、僕は失敗を恐れずにガーッとノミを入れるようにしています。そうすると、作品が生き生きと立ち上がってくるんです。それは、作品が「語り始めたな」と感じる瞬間でもあります。

—— そのときは、作品と対話しているような感じなのでしょう。

舟越 いや、対話というより、緊張感をもって「挑む」ような感じです。そこでノミの入れ方を間違えたら、作品は急にガラガラと崩れて、つまらな



いものになってしまいますから。

丁寧に彫ればいいというものでは、決してない。僕はあえて「丁寧さは重要でない」と、自分に言い聞かせています。丁寧にやろうとすると甘い作品しかできない。強さを感じられないものになってしまうんです。

作品は、人格が感じられるところまでつくっていきます。だから、できあがった作品が運び出されて、木くずだけが残ったアトリエに入ると、すごく寂しくなります。最近はずいぶん慣れてきましたけど(笑)。

—— ずっと人物像を彫られていま

すが、違うモチーフを彫ってみたいと思うことはありますか。

舟越 ほとんどありませんね。僕は子どもの頃から、人間の姿にとっても興味がありました。人間の姿を借りて作品をつくるときにだけ、僕なりの世界を表現できる気がしています。

ひとりの人間の姿としっかり向き合うことができれば、この世界を知ることができるんじゃないかと考えています。「人間とは何か、世界とは何か」ということを、ひとりの人間の姿を通して考え、表現していきたい。そんなふうに思っています。



壁にメモが貼られている。厚紙が好きで、菓子箱などを切って、それに書くそう。



手前にある鉛筆立ては、自作したもの。道具はしまわず、外に出しておく。



ふなこし・かつら
1951年岩手県生まれ。
彫刻家。東京造形大学彫刻科卒業、
東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。
ヴェネチア・ビエンナーレ、シドニー・ビエンナーレ他、
国際的にも活躍する。第18回平櫛田中賞、
第33回中原悌二郎賞を受賞。東京造形大学客員教授。
個展「New Drawings」がANDO GALLERY
(東京都江東区)で開催中(～6/28)。

特集

五感を使って鑑賞する

鑑賞の授業では、作品をさまざまな視点から捉え、新しい見方や感じ方を体験させることが求められます。本特集では、彫刻作品を見たり、さわったり、においをかいだり、五感をフルに使って鑑賞していきます。さて、授業の中で生徒たちの見方や感じ方は、どのように広がっていくのでしょうか。

授業レポート

見て、さわって、鑑賞しよう！

北海道旭川市立北星中学校

しょうじ のぶ ひろ 庄子展弘先生 × 2年2組 (生徒数37名)

日本を代表する彫刻家・中原悌二郎が幼少期を過ごした北海道旭川市は、「彫刻のまち」として広く知られている。市内に「中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館」（以下、美術館）があり、まちを歩けば至る所で野外彫刻を目にすることができる。

美術館では、10年以上前から「彫刻巡回展示」という取り組みを行っている。所蔵している作品を市内の小・中学校に一定期間貸し出し、鑑賞教育に役立ててもらおうというものだ。今回は、美術館から同じ作家の作品2点（下参照）を借りて、鑑賞の授業を行った。

彫刻をさわってみよう

「あれ？ 何だろう」

「何か置いてあるよ」

美術室に入った生徒たちの目は、黒板の前に置いてある、布で覆われた2点の彫刻にくぎ付けた。

「今日は美術館から彫刻を2点お借りしました。1点ずつ鑑賞してい



きますよ。では、まずこちら」と言いながら、庄子先生は彫刻を覆っていた布を勢いよく外す。

「おおっ！」

本物の作品を目の前に、生徒たちからは歓声上がり、思わず全員が拍手。

「皆さん、この彫刻は何でできているかわかりますか」と先生が問いかけると、「銅かな」「金ではないよね」と次々と意見が出される。

先生は彫刻の制作過程を示したパネルを見せながら、作品の素材がブロンズであることや、そのつくり方

について丁寧に説明した。

「今回は、この彫刻を自由にさわって鑑賞します。360度さまざまな方向からこの彫刻を見て、さわってください。作者がどんなふうにつくったのか考えながら、両手でさわってみるのもいいかもしれないですね」。

先生がそう話すと、生徒たちはワッと作品の前に集まり、うれしそうに彫刻をさわり始めた。

全員が作品をさわった後、先生はこう切り出した。「さあ、皆さん、さわってみてどうでしたか。気づいたことを発表してください」。

今回、授業で取り上げる作品

いずれも北海道出身の彫刻家・山内壮夫（1907-1975）の作品。山内は、母子像や人物群像を数多く残している作家である。「ソンの慟哭」は、ベトナム戦争で起きたソンミ村虐殺事件をテーマにしている。中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館に所蔵。



「親子像」 ブロンズ
66 × 34 × 17cm 1955 年



「ソンの慟哭」 ブロンズ
34 × 48 × 8cm 1972 年

生徒たちは思い思いに感想を述べていく。

生徒1「すごく硬いと思った」

生徒2「見た目はツルツルしてそうだったけど、さわってみたら、意外とデコボコしていた」

生徒3「冷たかった」

先生「硬い、デコボコしている、冷たい。他にはありますか。さっき、さわりながらおいのことを話している人がいたよね」

生徒4「手が金属くさくなった」

生徒5「鉄くさかった」

先生は生徒たちの発言を繰り返して確認しながら、板書していく。そして、作品全体を指し示して「では、これは何に見えますか」と問いかけた。生徒たちは口々に「人だよ」「人にしか見えない」と発言する。

先生「では、どんな人なんだろう」

生徒6「組体操している人」

先生「何人いるの？」

生徒6「二人」

先生「じゃあ、前に出て、この人とこの人って説明して」



特集 五感を使って鑑賞する

「二人で組体操している」と話し、作品をさわりながら、自分の見方を説明する。

指名された女子生徒は、「この部分が一人目で、この部分が二人目」と、作品の部分をさわりながら説明をした。「組体操をしている」という意見の他には、「じゃれ合っている」「二人は支え合っているんじゃないか」「三人にも見えてきた」などの意見も出され、授業はどんどん盛り上がっていく。

そこで先生は、ついに作品名を口にする。「この作品は『親子像』といます。さあ、親子だとしたら、どんな親子に見えますか」。

生徒7「(作品をさわりながら)私は、三人の親子だと思う。これ(左部分)がお父さんで、これ(右部分)がお母さん。真ん中が子ども」

先生「どうして、これ(左部分)がお父さんだと思うの？」

生徒7「いちばん大きいから」

生徒8「僕は二人の親子に見える。お母さんが子どもをおんぶしているんじゃないかな」

先生「おんぶしているって、どんなふう to ？」

生徒8「(おんぶのポーズをとって) こんなふうです」



「こんなふうにおんぶしていると思う」と言いながら、ポーズをとる。

腰をくねらせて「おんぶのポーズ」をとる男子生徒に、どっと笑いが起き、教室はますます明るい雰囲気。

先生があえて作品名を告げたことで、作品の見方がより具体的になった。また、作品にふれて説明したり、身体化したりする中で、生徒たちの見方が深まっていったようだ。

そして、先生は「二人の場合も三人の場合もあるようだけど、つまりどんな親子なんだろう」と、再び投げかける。すると、生徒たちからは、「仲むつまじい親子だと思う」「けんかするようには見えないよね」などの意見が出された。

比べてみよう

次に、二つ目の作品の鑑賞に移る。「ソンミの^{どうこく}慟哭」という、戦争で苦しむ母子をモチーフにした作品だ。

先生は「次の作品はこれです」と言いながら作品を覆っていた布を外し、「さっきの作品とどう違うか、比べながらさわってみましょう」と促した。そして、生徒全員がさわった後、「さっきとさわり心地はどう違いましたか」と問いかけた。

生徒9「こっちのほうが硬く感じた」

先生「『親子像』より硬い。他には？」

生徒10「でっぱりが多い」

生徒11「なめらかさが無い。ゴツゴツしている」

先生は「硬い」「でっぱり」などの言葉を板書。そして、さわった感想が出そろったところで、「ではこの作品は何を表しているんでしょうか」と投げかけた。すると、一人の男子生徒が前に出て説明を始めた。

生徒12「女の人が寝そべっていて、その上に重なって人が寝ている」

先生「二人目はどの部分なの？」

生徒12「(左部分を指して)ここです。この出っ張ったところが、二人目の腕なんじゃないか。こうやって(反り返るポーズをとって)、イナバウアーみたいな姿勢で重なって寝ている。二人で昼寝をしているんだと思う」

先生は「ここにも注目してほし



左／「この女の人の上に、もう一人が重なって、昼寝をしている」と説明する生徒。
右／「どうして穴が開いているんだろう」と先生は問いかけた。

い」と、作品の中央部分を手で押さえた。

先生「ここに大きな穴が開いていて、手が置いてありますね。どうして穴が開いているんだろう。なぜ手を置いているのかな」

生徒13「何か隠している」

先生「何を？」

生徒13「何か……何だろう……」

先生「隠すってことは、大事なものののかな」

そして、この「大事なもの」という言葉が呼び水となり、生徒たちの発言は、主題に近づき始める。

生徒14「おなかに穴が開いていて、その周りが膨らんで見える。女性が妊娠して、子どもを出産したから穴が開いているんじゃないか。だから、二人目は子どもだと思う」

先生「表情も見てみて」

生徒15「目がつり上がっているように見える」

先生「どんな気持ちなんだろう？」

生徒15「つらい……そうとうきついんじゃないかな」

生徒たちは、徐々に母子の気持ち

授業の展開(全1時間)

生徒の活動

- 5分 作品との出会い
「親子像」をさまざまな角度から見たりさわったりする。
- 10分 鑑賞
「親子像」を鑑賞する。
- 5分 作品との出会い
「ソンミの慟哭」を「親子像」と比べながら、見たりさわったりする。
- 10分 鑑賞
「ソンミの慟哭」を鑑賞する。
- 20分 鑑賞文を書く
2点の中から1点を選び、鑑賞文を書く。

評価規準

- 彫刻作品に親しみ、造形的なよさや美しさを味わおうとしている。(美術への関心・意欲・態度)
- 形や色彩の特徴、触感などをもとに、対象のイメージを捉え、彫刻作品に込められた創造的な表現の工夫を感じ取り、自分なりの意味を生成している。(鑑賞の能力)





真剣な表情で鑑賞文を書く生徒たち。

鑑賞文を書こう

鑑賞文を記入するワークシートが配られ、生徒たちは黙々と鉛筆を走らせる。

「黒板にはみんなが出してくれた言葉をまとめましたので、参考にしてください。作品をもう一度さわってみてもいいですよ。なぜ自分の心に残ったのか、根拠を明確にして書くようにしてくださいね」。

先生がそう促すと、前に出て作品をさわって確認したり、黒板の言葉を見ながら、友達と意見を交わしたりする生徒も。先生はこまめに机間指導を行い、書く手が止まっている生徒に助言をする。

そして、20分経った頃に「では、最後に発表をしてもらいます。Uさん、お願いします」と、一人の女子生徒を指名した。Uさんは次のよう



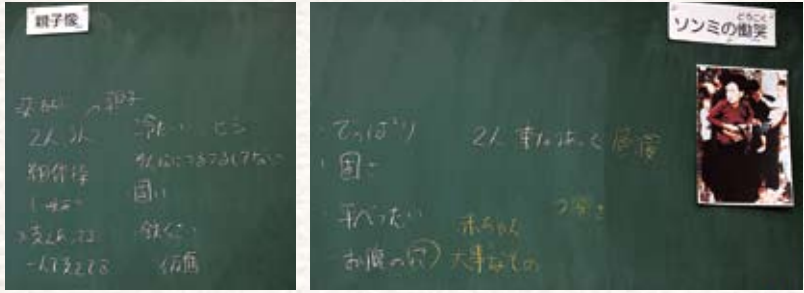
「ソンミの慟哭」について、鑑賞文を発表するUさん。

な表情で、体勢もつらそう。見てるだけで、こちらまで苦しくなってきます。手ざわりも硬くゴツゴツした感じで、色もどちらかというと黒に近い。『苦しさ』『つらさ』というイメージが強い作品だと思いました」

時間の関係で、発表は一人しか行えなかったが、多くの生徒がA4のワークシートをびっしりと文字で埋めていた。

そして、先生は最後にこう話した。「旭川市内には100基近い野外彫刻があり、山内壮夫さんの作品も9基あります。今度、見かけたら、ぜひさわってみてください。そうすると、見ただけではわからないことがたくさんわかり、見方が深まります。そうやって、彫刻作品を味わっていきましょう」。

生徒たちは、先生の話にじっと耳を傾けつつ、二点の彫刻作品を見つめていた。



板書を活用して

庄子先生は、鑑賞の授業で、板書を活用するようにしている。今回は、黒板を二つに区切り、「親子像」「ソンミの慟哭」で出た意見をそれぞれまとめた。生徒が自分なりに考えた意見は黄色のチョークで書くなど、生徒の意見を分類して板書するようにしている。

家族で支え合っている様子が表された作品



な めらかな手ざわりと優しい色で、やわらかい雰囲気が出ているところが好きです。また、全体的に丸い形で角ばったところがないのも好き。

私は、子どもを背負った母親とそれを見る父親の姿に見えました。デコボコが少なく、なおかつ切り離されていないところが、親子のつながりを表していると思います。つながっている部分の間にある穴も、家族のつながりのようなものが表されていると思います。とても仲がよい

ように見えます。

顔などが彫られていないのは、見る人に、どんな表情か想像してほしいという作者の意図があるのかなと

思いました。私は「全員笑顔」と想像しました。

「ソンミの慟哭」とは対極の作品だと思います。父親と母親が手を取り合っているように見えて、家族で支え合っている様子が表されていると思いました。

同じ作者の動物を彫った作品を見たことがあるけれど、今日見た作品は、それとは違う雰囲気でした。

金属でつくられているからさわりと冷たいけれど、どこかに温かさがある作品だと思います。



私はこう感じました

生徒たちが書いた鑑賞文の中から、特に印象深かったものをご紹介します。

ソンミの慟哭



H君

戦争の痛々しさが表現された悲しい作品



手

ざわりがザラザラというかゴツゴツしていて、さわると少し痛い。おなかの穴を押さえている手が不思議で、最初に見たときは作品名が思い浮かばなかったです。でも、母親みたいな人の足のところに、小さい赤ちゃんのような顔がありました。よく見てみると、おなか

先生の話聞いて戦争がテーマだということを知り、納得できました。なぜなら、母親の顔が苦しそうで、おなかの穴も何か残酷な感じがするからです。

子どもも苦しそうな顔をして上を見ているので、母親は妊娠しているときに戦争で殺されてしまって、子どもと一緒に死んでしまったのではないかと思います。

「親子像」よりも、ゴツゴツしているから、作者はそういうことで戦争の痛々しさを表現しているのだと思いました。そういう観点で見ると、こっちまで悲しくなってしまう作品だと思います。

親子像



Iさん



特集
五感を使って
鑑賞する

2つの作品では
手触りも違っていて
親子像の方はツルツルで、
ソンの慟哭の方はざらざらして
ソンの作品の意図により
それぞれの手触りが違うのだと思います。

同じ作者なのに全くちがう
雰囲気。彫刻を
作ってたんだと思った。

生徒の ワークシート より

生徒たちは、
自分の見方や感じ方を
思い思いの言葉で
つづっていました。
その一部をご紹介します。

全体的にいい感じだったので仲が良さそうにみえる。
手触りは少しぼろぼろしているけどつるつるしている。
外で支えあって生きているみたいなのがにみえた。

手触りがスベスベしていて
丸みがあるの。
人の笑いや喜びなどの
幸福のイメージが感じられ、
プラスの感情が見える。

親子像



親子の優しさが体の開きの
なめらかさにあらわれている。



ソンの慟哭



手触りが親子像よりもゴツゴツしていて、
どろどろとした感じが救いの手を求めているように見える。

体にあいた穴は
絶望を表していると思う。

この周縁が誘ったとしたら
おと下まな声で
三泣き叫んだのTと思う。

お腹に空いた大きな穴
それはベトナム戦争でうけた体の傷はもちろん
心の傷も表しているのだと思った。

授業を終えて

——さわって感じたことを大事に

彫刻作品を鑑賞する場合は、絵画作品のときと違い、たくさんさわらせ、そこから感じたことを大事にするようにしています。さわったときの印象から、生徒の見方を広げたり、作品の主題に迫ったりすることができからです。

私は、鑑賞の授業を行った後、必ず短い鑑賞文を書かせるようにしています。どうしてその作品に心ひかれたのか、根拠を明確にしながら自分の考えをまとめるには、文章に書かせるのがよいと思うからです。

今回は鑑賞文を書く時間を長めに取ったこともあり、ワークシートの裏側までびっしり書いている生徒がいました。それだけ、自分なりの見方で作品を鑑賞することができていたのだなと思い、うれしくなりました。

旭川には野外彫刻がたくさんあります。今日の授業を機に、生徒たちがそれらの作品を身近に感じてくれたらいいなと強く思います。



庄子展弘
しょうじ・のぶひろ

1968年北海道生まれ。旭川市立北星中学校教諭。北海道教育大学旭川校卒業。北海道ではいち早く対話による美術鑑賞に注目し、2004年の北海道造形教育研究大会において、「森の掟」（岡本太郎）、「刈田」（徳岡神泉）を題材として対話による鑑賞の授業を行った。08年の第3回美術鑑賞教育フォーラムにおいて提言発表を行った。

特集
五感を使って
鑑賞する



授業を参観して

光村図書中学校『美術』の著作者である上野行一先生に、今回の授業を参観していただきました。



上野行一
うえの・こういち

大阪府生まれ。帝京科学大学教授。大阪教育大学大学院修了。広告デザイナー、公立学校教諭、高知大学教育学部教授を経て2010年より現職。著書に『私の中の自由な美術』（光村図書）など。NHK高校講座「芸術（美術Ⅰ）」の番組の監修を務める。光村図書中学校・高等学校『美術』教科書の著作者。

価値意識を育てる 〈学びのしかけ〉

中学校第2学年及び第3学年の鑑賞の授業では、生徒一人一人が作品に対する価値をつくり出し、自分の価値意識をもって批評し合うようにすることが大切です。そのためには、生徒が自分の中に作品に対する価値をもてるようにする指導の工夫＝〈学びのしかけ〉が求められます。庄子先生の授業から〈学びのしかけ〉を探ってみましょう。

まず、授業構造に工夫が見られます。この授業では、同一作家・同一技法のブロンズ像でありながら、対照的な作品を対比鑑賞します。そのことによって生徒は、より明確に作者の心情や意図と表現の工夫について感じ取ることができるのです。

次に指導過程ですが、庄子先生の授業では、まず生徒に気づいたことを語らせませす。思いつきでなく、根拠を明らかにして語ることが大切です。そして、互いに語り合うことによって、自分が気づけなかった作品のよさや見方に気づいたり、同じものを見ても多様な見方があることに気づいたりするのです。

しかし自由に語るだけでは、話題が散漫になったり、表層的な話題に終始したりすることもあるでしょう。作者の心情や意図を感じ取ることが学習目標であれば、そのような鑑賞を促す指導過程を工夫する必要があります。この授業で庄子先生は題名を提示したり、「ここにも注目して」と見る部分を指示したりしています。「ソンの慟哭」を見て、最初「子どもの口が開いていたので、元気に

生まれたところ」と感じていたOさんは、題名を聞いてもう一度作品を見直します。すると、母親の顔はもちろん、子どもの顔まで苦しみや悲しみを訴えているように見えたと言います。そして、「おなかに開いた穴は銃で撃たれてしまったからではないか」と考え、「おなかにいた赤ちゃんが死んで、あんなに悲しい苦しい顔をしているのではないか」と考えたのです。Oさんは作者の意図と表現の工夫を感じ取ったのではないのでしょうか。

三つ目の学びのしかけは、板書の活用です。美術の授業では板書はあまり重視されていません。研究会などで話題になることもまずないでしょう。P6の板書の工夫に気づかれたでしょうか。「ソンの慟哭」について、「でっぱり」「平べったい」などさわって感じたことが左端に縦一列で書かれています。その右の列には「二人」「赤ちゃん」など見えたものが、そして右端の列には「昼寝」「つらさ」など思ったことが書かれています。生徒の鑑賞を「触覚」「視覚」「考え」に分類し、黒板の上で構造化しています。

そして四つ目は、授業のまとめとして鑑賞文を書くことです。生徒一人一人が自分の価値意識に沿って作品について、また授業で学んだことについてまとめるのです。鑑賞文にはその子が何を考え、何を学んだのかが記されますから、評価の観点からも貴重な資料となります。

言いたいことを言いつばなしの授業では価値意識は育ちません。生徒の学びを生み出すしかけを意図しておくことが大切なことです。

作家の肖像

第 5 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。

撮影
藤森武



1909-1990
土門 拳

どもん・けん
1909年山形県酒田市生まれ。7歳で東京へ移る。24歳のときに母親の勧めで上野の写真館の門生となる。営業写真に疑問を抱き、写真の理論と歴史を独学。報道写真家を志し、「風貌」「ヒロシマ」「筑豊のこどもたち」「古寺巡礼」などの作品を発表し、大きな反響を呼ぶ。生涯を通じて寺院や仏像など日本の伝統文化の撮影をし、脳出血で倒れた後も車椅子で撮影を続けた。1990年、80歳で死去。

時代と向き合った写真家

土門拳は1909(明治42)年生まれ。関東大震災も戦争も経験し、激動の時代を生きた写真家です。彼は、ほぼ独学で写真を学び、報道写真家を志しますが、「時代を撮る」ということに、先天的な才能のあった人だと思います。

彼と同時代を生きた写真家に、木村伊兵衛がいます。二人はまさに対照的で、木村が叙情的に写真を撮るのに対し、土門はその時代の構造までガシッと撮ろうとする。だから、土門の写真は、いつも野太くて、泥くさい。しかし、それは鍛錬のうえに生み出されたものであって、決して野暮ったいわけではありません。漆黒の闇の中で「底光り」しているような、深く強烈な印象を、私たちに与えます。

名文家・土門拳

6年ほど前、私は『風貌・私の美学』という、土門のエッセイ集の編集を務めました。改めて土門が書いた多くの文章を読んだのですが、実にすばらしく、すっかり虜になってしまいました。彼の文章は、彼の写真を見たときに受ける印象と、よく似ています。実直で少し強引、そして強い説得力があります。

この本には、土門が画家・梅原龍三郎(※)を怒らせた話が掲載されています。何度も執拗に写真を撮り続ける土門に、梅原がついにしびれを切らし、腰かけていた藤椅子を床に叩きつけたという話です。それで二人の仲が決裂したのかというと、そうではなく、その何年後かに土門はお詫びのため、再び梅原のもとを訪

れ、和解します。土門の写真に対する執念、そして人間くささがわかるエピソードではないでしょうか。

写真の鬼

土門は「写真の鬼」と呼ばれていました。梅原とのエピソードからもわかるように、写真を撮ることに対して、すさまじい執念があり、それを人は「鬼」にたとえたのでしょう。

私は、優れた写真家というのは、「対象から招かれる」ものだと思います。例えば土門の場合だと、たまたま訪れた広島から強烈に「撮ってくれ」と招かれ、それがのちに「ヒロシマ」という作品につながる。彼自身も「使命感みたいなものに駆りたてられて、憑かれたように広島通いすることになった」と述べています。「筑豊のこどもたち」「古寺巡礼」などの作品もまた、同じように対象から招かれた結果、生まれたのではないのでしょうか。

土門は脳出血に倒れ、59歳で車椅子の生活となります。しかし、弟子に車椅子を引かせ、時には弟子に背負ってもらいながら、写真を撮り続けました。入院しても、病床でカメラを手にしていたそうです。彼は死ぬまで「写真の鬼」であり続けたのです。(談)

※ 梅原龍三郎(1888-1986)
洋画家。京都府生まれ。浅井忠に師事し、渡仏後、ルノワールに師事。日本洋画界の巨匠と仰がれた。

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校『美術』代表著者。



上／しんこ細工 1954年
土門は下町の子どもたちを愛し、生き生きした姿を数多く捉えた。

左下／室生寺 雪の五重塔全景 1978年
30歳で訪れて以来、数えきれないほど室生寺に通い、40年目に初めて雪の室生寺を撮影した。

右下／梅原龍三郎 1941年
撮影をねばり、梅原を激怒させたというエピソードが有名。その後は、親交を結んだ。(すべて土門拳記念館蔵)

このコーナーでは、教科書に掲載されている生徒作品を取り上げ、奥村高明先生に、その作品の見方や考え方などをご紹介いただきます。

奥村 高明
おくむら・たかあき
聖徳大学児童学部教授。
1958 年宮崎県生まれ。
小・中学校教諭、美術館学芸員の後、
文部科学省教科調査官として
学習指導要領の作成に携わる。
専門は図画工作・美術教育、
鑑賞教育など。芸術学博士（筑波大学）。
『子どもの絵の見方～子どもの世界を
鑑賞するまなざし～』（東洋館出版社）、
『美術館活用術～鑑賞教育の手引き～』（美術出版社）など、著書多数。

1. 作品の記憶

仕事柄、よく子どもの作品を、本の表紙や記事に用いる。大抵の場合、子どものコメントが必要になる。ただ、執筆する時点では、作品をつくってから数年経っていることが多い。小学生ならすでに中学生、中学生は高校生以上になっている。頼む側とすれば、「何年も前につくった作品について覚えているだろうか」、「コメントが書けるのだろうか」と不安になる。でも答えは全て Yes だった。

今回取り上げる作品も同じだ。当時中学3年生だった作者は、すでに大学生になっていた。でも、作品に描かれているものについて尋ねると、あたかも今描き終わったばかりのように、制作のプロセスや、そのときの気持ちなどを「覚えて」いた。以下、作者からのメールを抜粋したものである。

（1）私

「未来の自分へ」という題材だったので、30代の自分を描こうと思いました。きっとその頃の自分は、平凡で普通の生活をしているだろうと想像しました。少し小じわができていて、アルバムを見ながらうたた寝している自分の姿が思い浮かびました。

（2）アルバム

薄い黄色のアルバムに、一人旅の風景写真が2枚貼ってあります。自分が写っていないのは、学校に居場所を感じることができず、いつももやもやしていたからでしょう。

（3）猫

当時飼っていた猫がモデルです。自分が30代になる頃には、もう生きていないだろうと思いましたが、きっとまた猫を飼っていると思います。

した。おなかの模様はうまく描けましたが、ヒゲと眉毛を描いたとたん、貧弱になってしまったように思います。

（4）カーテン

好きだった漫画をヒントにしました。色は、自分の部屋のカーテンと同じ赤色。カーテンを描いたら、風が表現でき、絵に動きが生まれました。カーテンの向こうには、緑が広がっているイメージです。青色を先に塗って、その上から赤色や白色を重ねて、風を表現しました（※1）。

（5）感情

平凡には、「つまらなさ」と、その中にある「温かさ」の二つの側面があると思います。絵の通り、平凡な未来になってほしいと思う自分と、全く違う未来になってほしいと思う自分。この絵を描いたときは、複数の感情がありました。

2. 私の世界

大学生になった作者が、中学3年生のときの作品について「覚えて」いたと述べたが、正確には「覚えて」いるわけではない。記憶は頭の中にあるわけではなく、それを引き出すようなものというよりも、むしろ「私」と「対象」との「間」に存在している。

例えば、「昔住んだ場所の地図を書いてください」と言われた場合、多くの人は距離や方向、細部などまで正確に「再現」することができない。しかし、その場に行けば歩き始め、自分の家にたどり着くことができるだろう。看板などの目印や道の間隔、距離、光や空気などと対話しながら、迷うことなく歩き回れる。

それは記憶が、単純に頭の中に入っているものではなく、対象との関係で成り立っていることを示している。



「平凡な日常」
段ボール・ポスターカラー 90×60cm 『美術2・3下』P19に掲載

作品も同じである。「昔描いた作品について説明してください」と言われたらそうとう困難だ。しかし、「私」が当時描いた自分の「作品」と向かい合えば、多くの場合、まるで昨日描いたかのように記憶がよみがえってくる。それは、記憶が「私」と「作品」の間に存在していることを示している。

3. 作品という「私」

本作の作者が興味深いことを述べている。

「美術は自分の世界をつくれるので好きでした。自分の世界を表現するのに夢中でした」

作品はただの完成品ではない。そのときの「私の世界」、私そのものである。

同じような言説が図工や美術の業界にはある。いわく「作品ができるときに『私』ができる」、「『私』をつくる図工・美術」などである。これらが言わんとしているのは「子どもたちは『私』をつくるように作品をつくっている」ということだ。

同時にこの言説は、指導方法や指導者の構えも問うている。

「指導者の指示どおりに描かせるのか」

「その子の世界を成立させようとしているのか」

「どこまで指導して、どこから任せるか」……などである。

本作品についていえば「未来の自分」だったという。おそらく、作品という「私」と、未来の「私」（※2）という二重の「私」の成立をねらったのだろう。その意図はこの子において見事に成功していると思う。

※1 先生に「青を入れると絵が締まる」と言われ、全ての色に青を少し足して着色している。
※2 「未来」とは言っているが、実際のところ、現時点の自己のメタ認知であろう。

本連載は、今号で最終回となります。
2年間ご愛読いただき、ありがとうございました。

美術部へようこそ! 埼玉県川口市立元郷中学校

元郷中学校は、校内の環境美化のために、さまざまな活動をしています。
今回は古い校舎を生まれ変わせた「校舎改造計画」の活動をご紹介します。

クロッキーで始まる部活動

放課後、しんと静まり返った美術室で、生徒たちはモデルを見つめ、真剣に鉛筆を走らせている。元郷中学校の美術部の活動は、毎日このようなクロッキーからスタートする。

「『人物をうまく描けるようになりたい』という生徒がとても多いんです。ですから、毎日5枚、クロッキーを描かせるようにしています。1年経つとかなりの枚数になり、それを振り返ると、確実にうまくなっているのがわかる。生徒たちに達成感を味わってもらいたくて続けています」と、顧問の木塚 暦 先生は語る。

部員数は計38名。みんな仲がよく、とても活気がある。特に目を引く活動は、2013年夏に行った「校舎改造計画」だ。

校内の環境美化に役立ちたい

本校の南校舎は築50年以上が経過し、壁がすすけて薄汚れていた。それを見た木塚先生は、なんとかして壁をきれいにしたいと思い立つ。美術部の生徒たちに提案すると、みんなすぐに乗り気になり、夏休みを利用して南校舎を生まれ変わらせる「校舎改造計画」を立てた。

まず、ブラシを使って壁の汚れを落としていく。実は、絵を描くよりこの作業がとても大変だったそうだ。「長いブラシを使って、上の方まで

磨いていくのは根気のいる作業でした。でもピカピカになって気持ちよかったです」と生徒たちは振り返る。約10日かけて、壁を磨き、階段の手すりにやすりをかけて、きれいにしていた。

そして、いよいよ絵を描く段階。壁画に統一感をもたせるため、青系の絵の具を使って線画で描いていくことに決めた。1階の壁、階段わきの壁、2階の壁と、場所ごとに分担を決め、海外の壁画作品やプリミティブアートを見ながらイメージを膨らませ、図案を考えていった。

竜を描いた生徒は「迫力を出すため、竜の首をぐるっと曲げて描くのが難しかった。こんな大きな絵を描くのは初めてだから緊張したけど、すごくいい体験だった」と話す。また、「真夏に制作したので、暑さとの戦いだった(笑)」と、当時の苦労を振り返る生徒も。みんな「仕上がったときはすごく達成感があった」と口をそろえる。

「普段から、校内行事に合わせて廊下や体育館の飾り付けをするなどの活動をしており、校内の環境美化にひと役買っています。この『校舎改造計画』もその一環。おかげさまで、いろいろな方からお褒めの言葉をいただき、それが生徒たちの自信にもつながっているように思います」。

そう話す木塚先生を、生徒たちは笑顔で見つめていた。



老朽化していた校舎の壁面が、美術部員の手によって美しく生まれ変わった。



毎日クロッキーで、人物を描く練習をする。生徒たちのまなざしは真剣そのもの。



撮影 鈴木俊介

教室を飛びだして

みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2014

今年9月からの開催に向けて、教育を大切にしたい新しい芸術祭の準備が進められています。その「山形ビエンナーレ2014」についてご紹介します。



ちのく山形県に、今年、新しい芸術祭が生まれる。その名は「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2014」。主催するのは東北芸術工科大学。美術大学による開催とあって、東北の若い人や子どもたちを強く意識している。「教育」を大きな使命と捉え、来場者が芸術を知り、創造的な表現に踏み出すきっかけとなることを目指した芸術祭だ。

コンセプト「東北の入口を見つけよう」には、東北の魅力や文化に触れる自分なりの「入口」を、来場者に見つけてほしいとの思いが込められている。これは、芸術監督を務めるアーティスト・絵本作家の荒井良

二さんが過去に関わってきた「山形の入口」を探す展覧会、「荒井良二の山形じゃあにい」と思いを同じにする。2012年に開かれた同展覧会では、まちの写生大会や映像づくりのワークショップなどを行った。

「芸術は大人だけのものじゃない。子どもたちも含めた、芸術のお祭りをつくりたい」とは、荒井さんの言葉。本芸術祭は、地域の子どもや大人、学生たちに広く開くということを大切に考える。荒井さんをはじめとした参加アーティストとともに、漫画や会場周辺マップをつくるなど、人々が集い、創造するプランが構想されている。新しい芸術祭が、東北の地の芸術の種を育てていく。



荒井さんになりきってまちの風景を写生する「なりきり荒井良二100人の写生大会」(2012年)の様子。

※みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2014
山形県山形市にて、
2014年9月20日から10月19日まで開催。
<http://biennale.tuad.ac.jp>

放 課 後
第 5 回
A R T



第 5 回

「東京オリンピックポスター 陸上」

かめくら ゆうさく
亀倉雄策

写真:早崎治, フォトディレクション:村越囊 103×72.8cm 1962年

※東京オリンピックの公式ポスターは全部で4種類。この陸上のポスターに加え、シンボルマーク、水泳、聖火ランナーがある。

日本のスタートダッシュ

私は、東京オリンピックが開催された1964年生まれ。もちろん当時の記憶はないが、市川崑監督の記録映画「東京オリンピック」でその感動に触れることができた。第二次世界大戦後、アジアで初の五輪。それを迎え入れる東京には新幹線、首都高が走り、高層ビルがどんどん建設された。日本人がたくさん外国人をみたのもこのときが初めてで、大会は大成功に終わり、敗戦国日本はこれをきっかけに高度成長へと向かっていったのだ。

ただ、このポスターは東京五輪開催の2年前に作られたもの。大会の成功を予言するような1枚である。当時、このポスターに触れた外国人たちはさぞかし驚いただろう。戦争に負けた小さな国の日本が、こんなにセンスの良いポスターを作れるなんて思っていなかったと思う。

吐く息、シュッと風を切り裂く音

が聞こえてきそうな躍動感だ。みる者はスタート時の緊張感を共有し、息を飲む。まっすぐに真実を表現しているように思えるが、実はこの写真は、競技的にはフィクションである。スタート直後にこれだけの差がつくのは、フライングで失格だ。しかし、横一線のきれいなスタートでは全ての選手の表情が浮き出てこないだろう。真実を追求するだけでなく、デザインとして競技者を配置したことで、真実以上の迫力を伝えていると思う。

写真の構図に加え、文字の書体や日の丸を表現したデザインの品も良い。「やるなー、日本!」。スポーツの祭典で、世界に日本の芸術・文化のレベルの高さをアピールしたことだろう。52年前のポスターだが、ここから日本はまさに世界と並んでスタートを切ったのだと感じる。

ポスターの構想者、亀倉雄策さん

は4枚のポスターのうちのこの1枚に3つのプランを考えていたらしい。それはスターターがピストルを撃つ瞬間、陸上競技のスタートもしくは決勝テープを切る瞬間、そして女子体操であった。結局、その中から陸上のスタートダッシュが選ばれたわけだ。時代の勢いもあったと思う。ぜひ他の3枚（水泳、聖火ランナー、文字だけ）もご覧いただきたい。

国が豊かになり、安定した今の日本が同じように6年後の東京オリンピック・パラリンピックのポスターを作るなら、どんなポスターになるだろう？ 考えると楽しい。同じスタートの瞬間をテーマにしても、100メートルではなくマラソンのスタートになるかもしれない。芸術・文化とスポーツには接点が多い。協働して作り上げれば、2020年はまた新たな日本のスタートになるに違いない。

増田明美
ますだ・あけみ

スポーツジャーナリスト。
1964年千葉県生まれ。成田高等学校在学中、長距離種目で次々に日本記録を樹立する。84年のロス五輪に出場。92年に引退するまで、日本最高記録12回、世界最高記録2回更新。現在は執筆活動、マラソン中継の解説に携わるほか、大阪芸術大学芸術計画学科教授を務める。著書に『カゼヲキル 1〜3』（講談社）など。